

ジョン・ミルトンの『失樂園』第2巻の交響曲化

森 谷 峰 雄
森 谷 美 麗
アントニ・ボネロ

〔抄 録〕

ミルトンの叙事詩『失樂園』を交響曲に換えようとしている。これは、他作曲家のように、それを題材にして、創作するのではなくて、この叙事詩に内在する潜在的可能性の表現である。この作品には、主に2つの潜在可能性があり、ひとつは、精神療法にわたる音響効果の領域であり、他は純粹の音楽の領域である。本研究は後者の領域である。

この研究ノートは、原文の内容がいかに変化して、交響曲に変化するかを、その2巻を例にとって、考察する。

本年は、ミルトン生誕の400周年にあたり、国の内外で催しがあった。今後もある。ひとつは、ロンドン大学で7月行われた国際ミルトン・シンポジウムであり、2つは、ドイツ。ベルリン、ゲツセマネ教会で7月開催された『失樂園』の音楽会である。3つは、日本のもので、上野学園大学主催の「ジョン・ミルトンの詩とヘンリー・ウィリアム・ロウズの音楽」が2008年11月20日開催されることになっている。特に、ゲツセマネ教会での、音楽会が意義深いように思われた。ここでは、ミルトンの小作品から初めて、『失樂園』の演奏があった。これは、Sing-Akademie zu Berlinの主催で行われた。3時間余に及ぶ演奏、特に、Friedrich Schneider, *Das verlorene Paradies*は感動的なものがあった。このように、ミルトンの『失樂園』と音楽には、特別に深い菅家がある。

今、筆者らが企画するのは、人類未踏の領域、『失樂園』全12巻の交響曲化である。これは、オペラ『失樂園』を創作した現代作曲家の巨匠クシシュトフ・ペンデレツキといえども、敢えてなさなかつた仕事である。今回その第2巻の途中経過を研究ノートの形で示す。そこから得られる、創造の過程の神秘を垣間見る。

キーワード ジョン・ミルトン、『失樂園』の交響曲化、芸術創造の神秘

1. 本稿の目的：芸術体験としての交響曲『失樂園』

『失樂園』には、7つ様態がある。それらは、1. テキスト、2. デジタル、3. 音圧変化形式、4. 純粹音、5. コンピューター音楽、6. 副次創造音楽、7. 副次創造の交響曲である。このうち、本研究ノートは7段階の未完成部段階である。このノートの本来の目的は、芸術品たる交響曲の完成である。この業績だけでも、人跡未踏の試みである上に、これを元に何かの論考を工夫しなければならない。そのアイデアはある。それはすなわち、第一段階の形式と最終段階の形式との間の、芸術体験の比較を論ずることである。それを目的に、この論を始める。

2. 『失樂園』の7つ様態

まずは、その過程にいたるまでの具体的対象として、サンプルをあげる。

第1様態：テキスト形式

High on a throne of royal state, which far
Outshone the wealth of Ormus and of Ind,
Or where the gorgeous East with richest hand
Showers on her kings barbaric pearl and gold,
Satan exalted sat, by merit raised
To that bad eminence:

(オームスや印度の富にも遥かに輝き優った
帝王の玉座に高く座り、或は燦爛たる
東洋の天地がその豊かなる手を以って、蛮民の王侯に
真珠や黄金を雨降らしているかのような玉座に高く、
サタンはその著しい悪の巧妙によって高められ、
威丈高に座っている。)

一帆足理一郎の訳による

ここでは、サタンの偽りの栄光が描写されている。

第2様態：デジタル形式

全デジタル数：2071

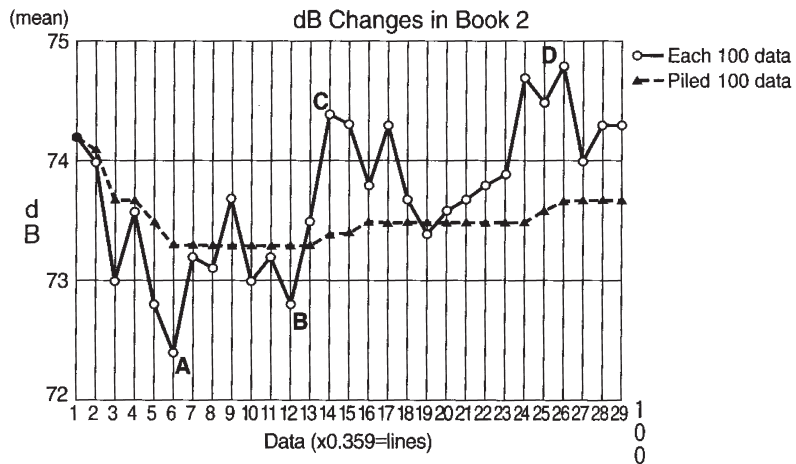
全行数：1055行

サンプル行数：5.5行

サンプルデジタル数：11

79.00	71.50	75.40	69.20	78.30	80.10	68.80	57.70	74.70	74.00	76.70
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

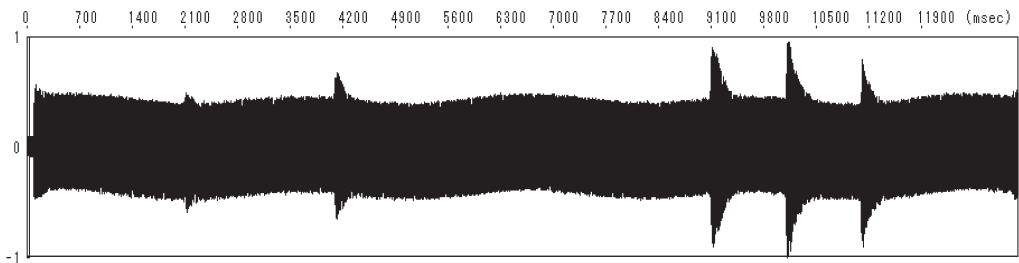
第3 様態：音圧変化形式（全体）



第4 様態：純粹音（wave波形）形式

全時間数：42.18.220（2530.8秒）

サンプル時間数：2530.8 × (5.5 ÷ 1055) ≈ 13.19（秒）



デジタルは、FM純音で、澄み切った音になる。雑念が払われ、心の穢れを清め、心の滓が、ろ過されて、穢れない純粹の心のみ残ったようである。この心から、新しい芸術の創造がなされる。すなわち、これは、新しい芸術創造の土壌となる。デジタルは、心の塵芥をろ過して、澄み切った音を作る。しかし、澄み切った純音に、人間の主体的芸術的意識が働かねば、芸術

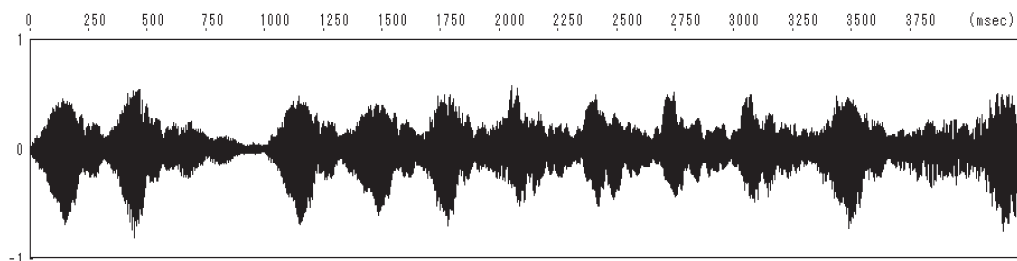
ジョン・ミルトンの『失楽園』第2巻の交響曲化（森谷峰雄、森谷美麗、アントニ・ボネロ）

は生まれない。それが、次のAPL、コンピュータ音楽である。これは、デジタルを元にある芸術科学者が開発したソフトによって出来た。

第5様態：コンピューター音楽（wave波形）形式

全時間数：13：55：175(813秒)

サンプリング時間数： $813 \times (5.5 \div 1055) \approx 4.22$ （秒）



この音響には、芸術達成感はないが、確かに人の心に躍動感を与える。このような擬似芸術に、人間の知能感性想像力が加わって、芸術作品が出来る。次は、APLから、ある音楽家が、創作した楽譜の一部である（全体の0.0052分の）。

第6様態：副次創造音楽（MIDI）形式

音楽芸術は、本来楽器によって、演奏して初めて理解・鑑賞できる。しかし、本稿は、文学部の論集であるから、その学術性の性格から、その方法に従う。もちろん、この形式をwave形式に表現できるが、それは、ある意味で、無意味である。なぜならば、人間の努力の結果は見えないからである。したがって、ここでは、楽譜で表わす。（以下同様）

2000-8-8-16

Mirei's Paradise Lost Book 2

solemnly

Mirei Moritani

The musical score is presented in four systems, each with a treble and bass staff. The notation includes various rhythmic values such as eighth and sixteenth notes, often beamed together. There are several triplet markings (indicated by a '3' over a group of notes) and fermatas. The bass staff in the first, second, and fourth systems has a '5' written below it, likely indicating a fingering or a specific musical instruction. The overall mood is solemn and dramatic.

命から命が生まれ、死から死が生まれる。芸術の創造もそうである。芸術の始めは人間の精神である。ある芸術家（人）から人へと芸術は派生的に創造されていく。機械装置からは、擬似芸術は生まれるが、それは命のあるものではない。（ただし、ミルトンの場合、「神聖さの希釈化の原理」が働き、超越水準が作品におよび、人間水準に巡る。それが、音響によって、機械にも伝わる、と私は主張する。）そこから、新しく、芸術が生まれる。この作曲家は、上の曲を「春の訪れ」とした。原作といかなる関係があるかは、別の機会に論じる。

第7様態：副次創造の交響曲形式

さて、次は、最終段階の交響曲である。これは、前段階の曲を交響曲にアレンジしたものであり、芸術性が高められている。しかし、いまだ未完成である。

Score in C
Work in Progress

Paradise Lost

Temporary Title
Book 2 - SKETCH
This is not a publication - do not quote

Anthony Bonello
based on material supplied by
Mineo Moritani

ano 1

iano 2

Pno. 1

Pno. 2

音楽は実際の演奏によってのみ、発表される。この曲の完成の暁には、演奏会を催すことを予告して、この稿を終える。

【付記】

本稿は、平成20年度佛教大学特別研究費によるものである。

(もりたに みねお 英米学科)

(もりたに みれい)

(アントニ・ボネロ 英国サリー大学音楽部)

2008年10月14日受理